

21. 当院におけるCDトキシン陽性患者感染対策上個室隔離必要性の検討

相原治幸（新東京病院感染対策室）

【目的】当院では、下痢症患者の約2割にCD関連疾患を疑うCDトキシン陽性患者が検出される。

対策上、下痢症患者すべてに個室確保が困難であり、CDトキシン陽性患者の個室隔離必要性を検討した。

【方法】2008年10月～2010年10月までの間に下痢症状（+）患者で、院内にてCDトキシンA検査（ユニクイック：関東化学）実施した386名を対象。検討因子は、性別、年齢、診療科、病棟、入院期間、個室期間、病床稼働状況、手指消毒剤消費量、炎症所見、栄養状態、他の感染症、薬剤投与期間など18項目。CDトキシン陰性例を対照群とし、CDトキシン陽性でも院内伝播疑いを検討群とした。

【結果】386名（男性236例、女性150例）の内、CDトキシン陽性例は88例、院内伝播疑い例は23例。CDトキシン陽性例の優位性因子は、診療科、病棟、他の感染症の3項目で、院内伝播疑い例の場合は、特定の病棟が優位性を示唆された。

【考察】今回、院内実施CDトキシン検査のみの判定だが、迅速な対応する為には必要だと思われた。個室隔離を耐性菌対策だけでなく、下痢症患者にも個室隔離の重要性と標準予防策の徹底を再確認した。

【結論】迅速検査の特性を考慮し、付加情報を含め判断し、病床管理に有用な情報提供ができる部門としてデータ分析する重要性を再認識した。

問合せ先047(366)7000

22. 2010年度のサルモネラ菌属のO抗原血清型の動向について

露木勇三 堀田富康 久保勢津子（株式会社サンリツ）

【目的】非チフス性サルモネラはヒトに下痢症状を起こす細菌であり、O抗原（67種類）、H抗原（80種類）、K抗原といった3つの抗原の有無や種類の組み合わせにより、約2,300種類の血清型がある。我が国では、1980年代より鶏卵が原因による*Salmonella Enteritidis*感染症が優位に占めている。今回我々は、2010年におけるO群血清型の傾向把握を目的として検討を行った。

【対象と方法】2009年1月1日から2010年10月31日までに検査依頼された糞便41,701検体と2010年10月の1ヶ月間に検査依頼された食材89検体を用いた。検出されたサルモネラはO群血清型判定を行い、2010年10月検出株は千葉県衛生研究所に確認同定を依頼した。

【結果】サルモネラは376株検出され、2010年10月の1ヶ月間はO7群12株（ヒト由来11株、食品由来1株）、O9群6株、O4群2株、O8群2株、その他1株の合計23株であった。過半数を占めるO7群のうち5株は*S. Bareilly*であり、*S. Thompsona*3株、*S. Risser*2株、*S. Montevideo*1株、食品由来株は*S. Infantis*であった。

【考察】例年、夏季のサルモネラ検出状況はO9群が最多数の血清型であったが、2010年度には変化が見られO7群が最多数血清型となった。O7群の最終同定を行った結果、*S. Bareilly*の増加は顕著であり、同時期に汚染食品の県内流通が強く疑われた。

【結論】サルモネラ血清型の動向を日々監視することにより、発生原因を追及する手掛かりとなることが示唆された。今後も臨床検体分離株と食品検体分離株の相互確認を行い、食中毒の原因究明に寄与できるよう検査体制の維持継続に努める。確認同定を実施して頂いた千葉県衛生研究所、依田先生、石嶋先生に深謝いたします。047-487-2631